

聖意体現

——マルコ伝第14章27～42節——

小池辰雄

1965年6月20日

なんじらは皆蹠かん 身に親しく共感する世界 「けれども、汝の」 羊の我 ゲッセマネの祈り 十字架という突破口 陣営より出でて 天下一品 太陽と地球の関係 キリスト体現 絶対恩寵の世界 御靈の主がわが中に

【マルコ14・27～42】

²⁷イエス弟子たちに言い給う『なんじらは皆蹠かん、それは「われ牧羊者^{ひつじかい}」^{つまづ}を打たん、然らば羊、散るべし』と録されたるなり。²⁸然れど我よみがえりて後、なんじらに先だちてガリラヤに往かん』²⁹時にペテロ、イエスに言う『仮令^{たとえ}みな蹠くとも我は然らじ』³⁰イエス言い給う『まことに汝に告ぐ、今日この夜、鶏ふたたび鳴く前に、なんじ三たび我を^{いな}否むべし』³¹ペテロ力をこめて言う『われ汝とともに死ぬべき事ありとも汝を否まず』弟子たち皆かく言えり。

³²彼ら^{彼ら}ゲッセマネと名づくる処に到りし時、イエス弟子たちに言い給う『わが祈る間、ここに坐せよ』³³斯てペテロ、ヤコブ、ヨハネを伴いゆき、甚く驚き、かつ悲しみ出でて言い給う、³⁴『わが心いたく憂いて死ぬばかりなり、汝ら此処に留りて目を覚しおれ』³⁵少し進みゆきて、地に^{とじま}平伏し、若しも得べくば此の時の己より過ぎ往かんことを祈りて言い給う、³⁶『アバ父よ、父には能わぬ事なし、此の酒杯^{あた}を我より取り去り給え。されど我が意のままを成さんとにあらず、御意のままを成し給え』³⁷來りて、その眠れるを見、ペテロに言い給う『シモンよ、なんじ眠るか、一時も目を覚しおること能わぬか。³⁸なんじら誘惑^{まじわし}に陥らぬように目を覚し、かつ祈れ。實に心は熱すれども肉体よわきなり』³⁹再びゆき、同じ言にて祈り給う。⁴⁰また來りて彼らの眠れるを見たもう、是その日、いたく疲れたるなり、彼ら何と答うべきかを知らざりき。⁴¹二度來りて言いたもう『今は眠りて休め、足れり、時きたれり。視よ、人の子は罪人^{つみびと}らの手に付さるるなり。⁴²起て、われら往くべし。視よ、我を売る者ちかづけり』



● なんじらは皆蹠かん

²⁷イエス弟子たちに言い給う『なんじらは皆蹠かん、それは「われ牧羊者^{ひつじかい}を打たん、然らば羊、散るべし』と録されたるなり。

これはゼカリヤ書13章に出てくる言葉です。

²⁸然れど我よみがえりて後、なんじらに先だちてガリラヤに往かん』²⁹時にペテロ、イエスに言う『^{たとえ}仮令みな蹠くとも我は然らじ』³⁰イエス言い給う『まことに汝に告ぐ、今日この夜、鶏ふたたび鳴く前に、なんじ三たび我を否むべし』³¹ペテロ力をこめて言う『われ汝とともに死ぬべき事ありとも汝を否まず』弟子たち皆かく言えり。

非常に簡潔に、例によつてマルコ伝式に書いてある。イザヤ書に

「蹠きの石」

という言葉もあるが、キリストは「蹠きの石」であつて、弟子たちもみな一人残らずこの蹠きの石に蹠いてしまう。そのことは、キリストはちゃんと予見しておられる。どんなに人間的にキリストに信頼しても、また親しくても、このキリストに蹠かざるを得ない。その必然性をもつてゐる。ところが、

²⁸然れど我よみがえりて後、なんじらに先だちてガリラヤに往かん』²⁹時にペテロ、イエスは十字架を担つてから、自分が復活することを予言されたが、弟子たちには受けとられない。聖靈が来るまでは、本ものでない。ペテロも、

「われ汝と共に死ぬべきことありとも汝を否まず」
と。この「べき」は非常に強い「デイ」という字ですが、
「どうしても死なざるを得ないことがあつても」

と言つて、最大の決意を披瀝^{ひれき}したのですが、イエスは
「三度 私を否むよ」

とおつしやつた。驚くべきキリストの靈視です。また、人間の弱さというものを本当に知つておられる。そのチャンピオンといわれるような弟子たちも、ついにキリストに蹠いて散り散りになつてしまふ。イエスは独りである。これが即ち我々の、神に添い得ないところの、人間の生れつきの決定的な殘念な悲しき性向です。

「ああ、我は悩める人なるかな、この死のからだより我を救わんものは誰ぞ」とパウロが言つたことです。

この蹠きの石に一遍蹠いて、ぶつ倒れるまでは実は分からぬ。キリストはその先をお見越して、

「甦つて、汝らに先立ちて」

と言つて、その當てにならない、誠に希望を抱き得ないところの者に對して、なお希望をかけておられる。ここにイエスの憐れみとその実力が隠されているわけです。



● 身に親しく共感する世界

今、「隠されている」と言いましたが、「かみ」（神）という言葉は
「かくみ
隠り身」

という言葉の略だとも一説に申します。イザヤ書45章にも、
「隠れたる神」

という有名な言葉がある。

「隠れたるに見たもう、隠れたるに聞いたもう神に祈れ」

と、キリストがマタイ伝6章で言つておられる。隠れた神の中に、実に本当に自分の身を
とつぱりと入れておられたのが、このキリストである。神の懷の中に入ることのできる人
だけが、

「神を知る」

ことができる。「知る」という言葉が、今非常に知的になつてしまつて、聖書の「知る」
とは、

「神の懷の中に在つて身に親しく共感する世界」

が本当の「知る」ということです。これができるたのはキリストだけです。私たちはこのイ
エスの中に、キリストの中に、キリストの懷の中に本当に飛び込んではじめて、

「キリストを知る」

ということになる。キリストを知ることによつて神を知るのであつて、決して神を単に瞑
想するのではない。

このキリストの中に飛び込んで、本当にキリストを知ることが彼らはできなかつた。どん
なに同じ飯を食べても、この弟子たちはできなかつた。キリストの世界は違うんです。だから、
「どんなに理解したつて躊躇くよ。どんなに決意したつてダメだよ。私の中に入るま
では、私がお前の中に入るまではダメなんだ」

ということが分かつて、福音の世界は正にこの「中の」世界です。中に入るまでは、
いくら外から研究観察しても、これはダメなんだ。これはもう、弟子の躊躇がよくそのこ
とを示している。

けれども、

「キリストの中に入る」

「キリストを中へ入れる」

とか言つても、これはそう簡単にいくことではない。そこには一つの道がある。

「私は道なり」

という、この道がある。そのことはもう少し先を読んでからぶつかつて参りましょう。



●「けれども、汝の」

³²彼らゲツセマネと名づくる処に到りし時、イエス弟子たちに言い給う『わが祈る間、ここに坐せよ』³³斯てペテロ、ヤコブ、ヨハネを伴いゆき、
「ペテロ、ヤコブ、ヨハネ」というのは、時々大事なときに連れて行かれるご連中です。

甚く驚き、かつ悲しみ出でて言い給う、³⁴『わが心いたく憂いて死ぬばかりなり、汝ら此処に留りて目を覚しおれ』

不思議なキリストの御言です。イエスともいうような方が、

「甚く驚き、かつ悲しみ出でて言い給う、³⁴『わが心いたく憂いて死ぬばかりなり』

とは、どういうことだろうかと判断に苦しむようなわけです。神の人なら、泰然として、どんなことにも動じないであろうと思うわけですが。詩篇42篇に、

「¹ああ神よ、しかの^{たにがわ}溪川をしたい^{あえ}喘ぐがごとく、わが^{たましい}靈魂もなんじをしたい^{あえ}えぐなり。²わがたましいは渴けるごとくに神をしたう。何^{いす}れのときにか我ゆきて神のみまえにいでん。……⁵ああわが靈魂よ、なんじ何ぞうなだるや。なんじ神をまちのぞめ。われに聖^{みかお}顔のたすけありて、我なおわが神をほめたたうべければなり。」（詩篇42・1～5）

というような詩篇の言葉があるが、これと似通つた境地だろうかと思ひます。私たちと同じ弱さを担つた人間のイエスです。ヘブル書にも、

「罪の他は、すべてのものに試みられて、悲しみを知り、私たちを心から思いやることができる」

というようなことが書いてある。そういうたたイエスなんです。全く、すべての弟子たちからも躓かれ、頼みとするこの三人も頼みにならないというような土壇場にキリストは来て、そのこともよく分かつておられた。

汝ら此処に留^{とどま}りて目を覚し^{おれ}』

と。けれども、彼らは、後の方で読むように、どうしても目を覚ましていることができないで眠つてしまうわけです。

³⁵少し進みゆきて、地に平伏し、若しも得べくば此の時の己より過ぎ往かん

ことを祈りて言い給う、

デューラーは、この「地に平伏して」という言葉をその通りに描いて、キリストがまるで十字架の形をして大地に平伏している絵を描いている。私はこのデューラーの、大地に十字架の形をして平伏しているこの絵は素晴らしい表現だと思う。

³⁶『アバ父よ、父には能わぬ事なし、此の酒杯を

この十字架の苦杯を、

我より取り去り給え。されど我が意のままを成さんとにあらず、御意のまま



「成し給え」

「けれども、汝の」

と。こここのところは原語でいうと——原語といつてもギリシャ語ですが、キリストの原語はアラミ語ですけれども——たつた二字で表現されて、非常に強い言葉です。イエスのこの生涯は、今の近代人の「自由、自由」という自我、いわゆる自主的な在り方とおよそ正反対である。求められているのは、汝の意志、聖意です。

「汝の思うことを成してください」

というのが、彼の祈りの究極の祈りである。それはアルファにしオメガである。それは、

「どうか、あなたの御意のままにして成してください」

といって、なにか少し傍観的に普通、響くけれども、そんなことではもちろんない。申し上げているとおり、

「この私を」

といって、そこに完全に身を提して、提身しておられる。提身の態勢です。提身でなければ、

「御意を成させ給え」

という祈りは空言になってしまふ。自分をそこに投げだして、献げだして、

「どうか、御意を」

と。私たちが何を為していくも、それが私されているのでは、本当のことができない。人の目にはどう見えても、その為すことが、その生活そのものにおいて自分が投げだされてあるということです。キリストの前に自分が投げだされている。

「どうか、お使いください」

と。

●羊の我

「主の祈り」の中に、

「御名の崇められんことを」

とあります、

「あなたがなきつて、あなたの栄光が現れることが私の喜びです」

という、この角度が本当の力となる。

イエス・キリストはそれを正直、貫かれた。それを貫かれたのはイエス・キリストの他に一人もいない。

「汝の意志を成させ給え」

と言つて、提身して貫いたその姿を「義」といいます。「義」は「羊の我」と書く。即ち、牧者に対する羊の姿です。羊が詩篇23篇のごとくに、従順に牧者に従つて行く。緑の牧場、憩いの水汀に、また盜賊や猛獸のいる谷間であろうといずこなりとも、喜びまた恐れなく



どこでもついて行く。

「遂にその十字架の死に至るまで従い給えり」

という、あのピリピ書3章にあるところの事態がこのキリストの従順です。けれども、それは喜んで従う。服従ではない。単なる「命令だから」とか何とかということではない。

「神の意志はわが喜びである。汝の意志の在るところにわが平安あり」

と、ダンテの『神曲』の天国篇第三曲に出ている。汝の意志にこそ喜びと平安があり、また本当にそこにこそ力がある。神の意志というものは——人間の意志はダメですよ、當にならぬけれども——神の意志には同時に力がある。実力がそこにかかっている。神さまが意志するところ、それが意にせよ、^{こころ}ことばにせよ、^{ことば}にせよ、

「わが言は靈なり、生命なり」

と言つて、直ちに実現していく。キリストがそれを受けとられたから、イエスの御言、その業は言行一如ですが、みなこれは神からの、上からの貫きがそれを為さしめる。

「何も私はできません。私は何も言えません。あなたがしてください。あなたが為さしてくれる。あなたが言わてくれる。私は何も善くありません。あなただけが善きひとです」

と。イエス・キリストは神さまに向かつて完全に「無」であつた。私がしょっちゅう申し上げているこの「無」というのはそういうわけです。即ち、虚無ではない。無私、私が無い、私心が無いことです。この私心がない世界が本当に強いわけです。

イエス・キリストは、神さまを本当に喜んでいる。その下に本当に平伏している。平伏しの姿が本当の独立なんです。この平伏しは、およそ靈的傲慢とか、あるいはパリサイ的な自己義認だとかとはおよそ違う。己の信仰すら何ものとも思わない。そういう絶信の信の世界に、イエス・キリストは、賜りたる神の信を本当にいただいて動いている。本当に神の靈がキリストの中に宿りたもうたからこそ、それができた。

●ゲッセマネの祈り

「あなたには為し能わぬことはありません。何でもおできになります」と。キリストは、

「我に居らずば、何事をも為し能わず」

と言われる。そのキリストは神においてこそ何事をも為したのであって、自分で何かをしたのではない。彼は自分の靈力で何かをしたのではない。そもそも、この時に神さまに、

「よし、お前はいきなりこの天界に来い。お前はよくその生涯を貫いて私に従つてきた。だから、お前の勝利は今、直ちにエリヤよりも素晴らしく天に昇ることである」



と、言われて、神さまは天界にキリストを昇せ給うことはもちろんできたわけです。

「十二軍の御使を与えられて、ローマ軍をやつつけ得ないことはない」

と、キリスト自ら言われた。そのようなことでありながら、勝利をもちながら、そこに徹底的な敗北の姿をとろうという。罪悪人の、極悪人の姿を十字架においてとろうという。

これが絶対矛盾の世界です。これほど大きな矛盾は世の中に東西古今にないわけです、神の子キリストが極悪人として十字架されるというようなことは。宗教的天才の殉教の死とは違う。これは全然別な十字架です。これは贖罪の実質を、実力をもつたところの十字架です。贖罪の実力をもつた十字架であつて、

「お前は、このバプテスマを、この杯を飲み干せ」

という。我々のどうにもならない八方塞がりの私たちに、天界に対して道を開きたもうたのがこの十字架です。そのことをキリストは祈りの中で、

「汗は地上に落つる血の滴の如し」（ルカ22・44）

とルカ伝に書いてあるような祈りの中で、この絶対矛盾のところを受けとられて、旧約の宗教を、

「きずなき羔羊を毎年一回ずつ献げる」

ような——幕屋の聖所および至聖所におけるの大祭司の、ヘブル書に書いてあるような事態——これを自ら大祭司となり、自ら羔羊となつて、正にこの義そのものをここに全うされたわけです。

その十字架への道の一番決定的な、これは人類の歴史で一番激しい決定的な瞬間です。このゲッセマネの祈りというのは、救いが成るか成らないかという、大きな瀬戸際です。

今までかくも慕われたキリストが、神の言を伝え神の業をそこに証し給うたキリストが、最後のこのゲッセマネで、もし、この祈りを間違えてとられたら、これは大変なことである。それでも、それは自明なことではなかつた。イエスにとつては、いつもそれは本当に真剣勝負の事態として受けとられて行かれたわけです。けれども、それは実に神の御靈によつて、イエス・キリストはそこを突破されたわけで、決意や何かではもちろんない。

そういう絶対の孤独において、神さまの、旧約聖書を完全にここで自分が背負うところの大重要な成就、律法の本当の成就、罪の本当の贖い、ということをこのゲッセマネの祈りで突破されたことが本当の勝利であつた。

●十字架という突破口

イエスがバプテスマのヨハネから洗礼を受けられた。悔改めの必要のないキリストが、同時に悔改めのバプテスマとまた聖靈のバプテスマを受けられた。これが第一回の大重要な時です。御靈が鳩の如く彼の上に、彼の中に臨まれた。

それで、サタンとの一騎打でもつて、今度は四十日四十夜の決闘をされて、ここで本当



に御靈によつて彼は勝ちたもうた。どこまでも、神を立ておられたのであつて、自分の靈力とか何とかということではない。神の御靈の力がそこに働いて、イエスはサタンを擊退された。

それから後、キリストの一切の為すことと言わることは、神の御靈の御言であり、御靈の業が彼を通して展開していく。彼はどこまでも、神のものとしての自覚です。

「汝の聖なる意志を」

と言つて貫かれた。

そして、変貌の山において、いかに彼が素晴らしく輝かしい——いわゆる今までの肉体が戻つたどころのさわぎではない——もつと素晴らしい靈体の現象に来て輝かれた。これが十字架を突破しての復活の輝きの予表です。

そして、最後にこのゲッセマネの祈りにとられた大事な瞬間であつたわけです。

「信仰、信仰」

と言うけれども、十字架がそのようにして、私たちの自我をすつ飛ばしてくださつた。十字架がこの自我をすつ飛ばしてくださつたから、もはや、今の私がどんなものであろうと、現状がどうであろうと、皆さん一人ひとりは何の心配もいらん。我々の過去も現在も未来も、この十字架において贖われざる事態は一つもない。

そういう絶対の恩寵に対して無条件にこれの中に平伏す。本当にこの恩寵に平伏すまでは、この世界に入れない。この十字架という突破口——キリストが突破してくださつたこの突破口——を通つて、イエス・キリストの中に、懼れなく懐の中に入る。それが即ち、イエス・キリストの聖靈の、御靈のキリストの中に入る事態です。

この十字架と御靈の事態は絶対に切り離すことができない。これは祈りの世界で、

「われキリストと共に十字架されたり」

ということを、パウロと同じように受けとる。もう、そこの世界は、何ものにも拘束されないところの魂の自由です。その魂の自由の中で、

「イエスさま、あなたと私はもう一つになりました」と言う。

「われキリストの中に、キリストわが中に」

と、パウロがあんなに何回も言つてているのは、この中にパウロが入つてゐるからです。それが聖靈の世界です。

●陣営より出でて

私は時々申し上げますけれども、今までの無教会では

「十字架、十字架」

と言うけれども、本当に祈りの世界でそこに入つて、キリストの生命の世界に私は入つて



みたら、正直、今までと違つたんだから仕方がない。なんと、聖書のこの文字が本当に躍動して響いてきたか。パウロがなぜ、こんなに聖靈のことを言つてているか。どこを一体、私は読んでいたんだろうかと、正直、あのとき思つた。それが聖靈のバプテスマといふことです。

「洗礼・聖餐はいらない」

と言うけれども、形式の「洗礼・聖餐」はどうでもいい。本当の洗礼、御靈のバプテスマ、本当のキリストの

「我を食らえ、我を飲め」

というこの聖餐を事実、全存在をもつて全身的にこれを受けとつていないうような信仰は、どんなにそのすじがよろしくても、これは使徒的な、使徒たちが本当にいたところの世界とは質が違う。

私は、無教会を相手にしても、決して一步も退きません。これは自分の体験からはつきり申します。そのために、私がそんなことを言うものだから、非常に憎まれてしまつて、ていよく私は無教会からはね出されている。

「陣営より出でてキリストの御許に行く」

とヘブル書13章13節に書いてある。この陣営から出てキリストの御許に私は召されている。どうか、本当にもう、この世界に気がついてください。皆さんがそうでないと言うわけではないけれども。もつともつと、使徒的な質、使徒と同じ質の人になつてください。人間は私は小さい。器は小さい。いいです、そんなことは。私は社会的地位のことはひとつも問題にしていない。皆さんが、もし、

「大学を出なければ福音がわからない」

なんて言つたら、私は絶対にノーと言います。無教会が大体、インテリ階級のインテリ先生が、非常にこの世的に才能の豊かな方が多いものだから、つい学問のある先生方の言うことに権威があるかのとく思うが、そんなことはない。皆さん一人ひとりが本当にキリストの御靈の人となつたならば、それが男の人であろうと女の人であろうと、学問なんか問題でない。

「本当の知恵はこの世の知恵よりもはるかに素晴らしい」と、パウロがコリント前書の始めの方で言つてはいる。

「神のことはこの御靈によらなければ分からぬ。この世の靈ではどうにもならん」と言つてはいる。かえつて、学問が災いしている。

実は、一切の人間の知情意というものは、この聖靈によつてはじめて本当に善用活用されるのであつて、パウロはその好例です。彼は優れたやつだつたんだけれども、それは自己中心であつて、己の義を立てていた。己の熱心でいかにも善きそつだつた。彼は



「律法の義につきては責むべきところなき」
ようなチャンピオンだつたけれども、イエス・キリストにぶつかつて、キリストにぶつ倒されて、

「わが眼より鱗の如きもの落ちたり」ということになつた。

「眼の梁木」

が、彼はわかつた。梁木とは

「己を義とする」

ことであつた。これをキリストから直々に抜かれてしまつて、本当にパウロは平伏し、荒野で深く祈つた。そして、彼は立ち上がつた。

「イエス・キリストは私の一切である」

と。それで、キリストはパウロを全く今までとは、コペルニクス的転向をもつて逆用なさつたわけです。

●天下一品

皆さん一人ひとりは天下一品ですから、人を羨むことは何もない。皆さん一人ひとりが、世界の誰とも代えることのできない大事な一人ひとりの存在である。その生命というのは、「キリストのこの生命を失わば全世界を得るとも何になるか」という生命です。私たちの中においてキリストが為し給う。キリストが為し給う人を証人という。自分の何かではない。それぞれの存在を通してキリストの名が崇められる。イエス・キリストの名が本当に崇められる。私たちはその前に本当に讃美する。讃美とは本当に神の御名を讃えること。キリストの中に私たちが、一人ひとりが入りますから。

今、日本は、日本人は本当に大変なところにいます。いずこの事態をみましても、もう望みがないような事態です。今度の選挙をみましても、いろんな現象において全てが表れている。なんとダメになつてきただろかと。小学校から大学に至るまで教育がダメです。もはや、理屈やただ理論でもつて、人間はどうにもならん。もう日本は、一人ひとりに宿るところの神・キリストの靈が、キリストの靈が宿つた人が本当に突つ走つていかなければ。この原始力的な存在と一人ひとりがならかつたらば、道がない。

普通の言葉でいうと革命という、人間革命的なことが一人ひとりにおいて起こつて、それを本当にやり遂げていかなければ、生易しい信仰が何万人いようと、それはダメです。クリスチヤンが何人いようと、カトリックが何人いようと、プロテstantが何人いようが、無教会が何人いようが、ダメですよ。

問題は——どこの集会だつていい——一人ひとりが本当に、個が、個体が本当に一切を荷うような驚くべき力は、これはキリストが与えたもう。このキリストの聖靈の力がなく



して、聖靈の生命がなくして、何の信仰であるか。もうはつきりしている。

どうか、皆さんせつかくこの使徒的な信仰の質に、私たちはぶつかってきたんだから。パウロさんがあれだけ諸々の難難を——コリント後書11章に列挙してあるが、よくも彼は

それで死ななかつたろうかと思う——そのような難難を突破し、牢屋に繋がれても、

「お前たち、喜びなさい。喜び喜べ」

と、彼はうれしくてしようがない。イエス・キリストの生命が泉のごとく爆発するから、彼はうれしくてしようがない。それは

「パウロの信仰」

とかいうのではない。パウロにおいて生きていたキリストの靈なんです。

どうか、皆さん、クリスチヤンがくすぶついたらおしまいですぞ。どのような状態にありますても、どのような運命が来ましようとも、それを本当に突破していくことのできるのは、何ものをも私していないところの、

「一切は、神さま、イエスさま、あなたが現れてください。あなたの私は証人です。

あなたを現す者です」

ということです。

「汝らは世の光なり」

と。私たちは、

「はい、光となります。私は光でござります」

と。それは、わがうちなるキリストの靈をみて、そう言うのです。自分が光るので何でもない。けれども、この破れ衣の土の器は、その中から光るもののが光る。

●太陽と地球の関係

地球は太陽に引っ張り回されているではないですか、もの凄い力で。また、その光熱でもつてこんなにスクスクと全てのものが生きているではないですか。私は一番、この太陽と地球の関係が好きなんだ。地動説でグルグル回つていい。太陽は、原子力的なもの凄い爆発をしている。けれども、これが地球を引っ張り回して、生きとし生けるものを生かしている。

いわんや、靈的存在としての私たちのこの事態がイエス・キリストにこのように引っ張り回され、このようにイエス・キリストの生命が私たちを、

「どんなことがあつても絶対に死なないところの事態にきているぞ」と、生かしてくださつていて。

「われキリストと共に十字架されたり。もはやわれ生くるにあらず、キリスト

わがうちに在りて生き給うなり」

と。本当に平伏しの祈りの中で自分をキリストの中に、懷の中に飛び込んで、投げ入れる。



「己」を棄てる

とはいづこに棄てるか。キリストの中に棄てればいい。キリストの中に己を棄てる人は本当にキリストを現す人になる。それは、キリストはその力をもつて引っ張るというのだから。もう、その十字架で完全に私たちを贖いとつたから、

「心配はいらんから、来なさい」

と言つてくださるから、私たちは、

「はいっ」

と答える。「はいっ」というこの一言です。そして、その中に樂に入つていく。

「私はキリストの力でもつて、もうどうしようがありません」

というのが本当の信仰の世界です。「信仰」なんていう言葉が躊躇になるから、私はあまり使いたくない。これは

「信受」

であり、

「信交」

信の交わりであり、

「信行」

信の行である。ただ仰いでいるばかりではダメです。

皆さん、本当にこの世界に入ると、生活で不思議なことが起きてくる。行き詰まつたと思ったら、行き詰まらない。いろんなことをあなた方は経験して、

「いや、困ったな」

ということがある。病気のことや、学生なら試験のことや、就職のことや、家庭のことや、いろんなことがあるでしょう。どんなことが来ても、このイエス・キリストをもつ者は絶対に負けません。ニコニコと本当に喜んで、そこを突き抜けていくことができる。

「私の中のこのキリストの光を何と代えることができましょうか。このキリストの

生命を何と代えることができましょうか」

と。皆さんが本当にはらわたの底から告白する。そして、何とかして、そういう行き詰まつた人たちに、どんな絶望的な事態でも絶対にそれに屈することなく進ませることができる。

「神の国を来たらせる」

とは、このように神の国を本当に中に持つている人でなければ、

「御国を来たらせ給え」

という祈りは空言である。



●キリスト体現

イエス・キリストは本当にそのようにして、最後のゲッセマネの祈りでもつて完全に神の御旨を身に体した。聖意を体現された。この「十字架」が聖意の体現である。贖罪の体現であり、また、この「復活」のキリストが靈生の体現である。体で現した。口で表したのではない。体で、全存在で現した。やがて天界に行かれて、

「今に、私はお前たちの中に入つてくるぞ」

と。ただ、

「イエスは神の子である」

という事態を信じたつて何になるか。贖罪したという命題を信じたつて何になるか。本当に贖罪されている。キリストの生命を生命としていくという、そういういた意味において、私たちが今度はキリスト体現にならなくては。キリストは聖意を体現なさつたが、私たちはこのキリストを体現する。もはや、それはいわゆる信仰的英雄でも何でもない。

イエス・キリストのこの事態は、大自然のような人になるわけです。そよ風のごとく、無風のごとく、嵐のごとく。あの四大の地水火風のごとくなる。自分自身がこのキリストの体現をすると本当に地水火風のごとく、もはやその人の本質をつかまえることができないようだ。

「一体、あの人は何だろうか？」

というような、実に変幻自在になる。それは本当の中心があるからです。パウロが、

「¹¹われ窮乏^{ともしき}によりて之を^い言^いうにあらず、我は如何なる状^{さま}に居るとも、足ることを学びたればなり。¹²我は卑賤^{いやしき}におる道を知り、富に居る道を知る。また飽くことにも、飢^うることにも、富むことにも、乏しき事^{ともしき}事にも、一切の秘訣を得たり。¹³我を強くし給う者によりて、凡ての事をなし得るなり。」(ピリピ4:11～13)

「富めるにも、貧しきにも、一切のことに自分は処することができます。持てる者のごとくであるが、何ものも持たず。持たぬ者のごとくであるが、一切のものを持つている」

と、いろいろなことを言つてゐるでしょ。あれは、パウロはみんなそういう境地からものを言つてゐる。パウロの書簡なんかひとつも難しくない。皆さんはパウロを讀んでも、ヨハネを讀んでも、御靈の世界に入ると、みんな

「そうだ、そうだ」

と讀めてしまう。

●絶対恩寵の世界

パウロも



「異端の首」

と言われた。神さまの御国を誰が嗣いでいるかは誰も知らん。神さまだけが知つて、天の生命の書にちゃんと記している。人間の書いた歴史なんていうものはおよそ訳のわからないものだ。神の歴史の中に私たちが本当に、存在そのものを文字として、不立文字として、存在そのものを文字として進んでいく。私たちの名が御名のゆえの名でありまして、決して私たちの名のための名ではない。

「御名のゆえに我らを正しき道に導びき給う」

とある。論より証拠、キリストを立てないところには力が来ない。どんなに良さそうでもダメになる。

「天上天下、わが慕うものは汝のほかになし」

と詩篇73篇にあるけれども、イエス・キリストをかくも慕い、これが私たちのはらわたの中心に燃えてきたら、皆さん、もういいですよ。このキリストの絶対恩寵の世界に無条件に入れられて、

「われ汝を喜ぶ。あなたは私の喜びである」

ということになる。

「心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くして、主なる汝の神を愛せよ」

という、

「尽くして、尽くして」

というのは、キリストの方から尽くしてくださつてているから、その「尽くして」があなた方を通してキリストの方に向かつてのぼつていく炎みたなもの。キリストが

「われ汝を愛したり」

と言われる。それは、

「汝がわれを愛した」

のではない。

「私がこんなに生命を棄て、私がこんなに生命を与えている」

という、このキリストの愛というものです。この愛に感じたらばもはや、「尽くして」という全的な質が私たちの中に来ている。

「父の全きが如く全かれ」

という。この「全き」というものは、私がどんなに「マイナス99」であつても、「1」という全きが、靈核が、靈的な核が来ているんだから。

「この1という全きを、父の全きを、私はお前に与えたんだから、必ずこれが今に展開して、お前はやがて——地上ではダメだろうけれども、地上では三日月だろうが——やがて満月となる」

と。これがキリストの実力の約束です。



皆さん一人ひとりが、みなそれぞれ全さの世界に入つてくる。みなそうです。だから、お互いに大調和となつて神さまを讃えることが存在の姿ではないですか。どうか、皆さん、もうケチくさい考えはよしましよう。のびのびと行こうではないですか、のびのびと喜ばしく。

今は、いわゆるいい加減な信仰で体裁よくやつてゐる世界ではない。この終末的な現実は、日本においてそのようなもの凄い魂が——キリストの言は單なる言葉ではないですよ——これが皆さんの中で本当に生きている。そして、

「ああ、私はとにかく失敗だらけの生涯だつたが、しかし、地上に失敗のものは、

それは本当に天上の成功である」

と。それは人間的な成功でなくて、本当の天的な成功というものは地上では失敗の姿でしょう、相対的なことを問題にしてないから。

どうか、若い方も、今この福音に接しているということは大変なことですので、何とかして友人諸君に、

「君たち、来てみろ。来たりて視よ、この聖書の世界に」

と言つて、祈りをもつて——何も集会に来いということではない——

「この福音の世界に」

と言つて、一人一人三人と伝えていく。

「神さま、一年に一人どうかこの世界に入れてやつてください」

という祈りをもつて、人を見つけてくださいよ。即ち、証人となるということは、新しくその証人をつくることが本当の証人となるということです。新証人をそこにつくりだすよう、創造的な証人です。ただ

「私はキリストのものだ」

なんて、威張つたつてどうにもならん。そんなものはキリストでなくなつてしまふ。パウロは、

「この同胞のためには、たとえ、キリストに棄てられても」と、あの凄い、同胞を救済するところの悲願というものは、靈願というものは、イエス・キリストの靈です。

●御靈の主がわが中に

「汝の意志を」

と言うときには、自分を完全に否定してかかっていく。汝に「然り」と言うものは、我に對して「否」と言う。我に對して、自己に對して「否」というときに、本当の力が出てくる。どうか、今までのいわゆる自由主義、勝手気儘な自由主義なんていうものは、いわゆる日本人のやつてているような民主主義とか、そんな「主義」なんていうものでは——「無教



会主義」なんて、なぜ「主義」と言うか、福音の世界が「主義」でもつてつかめるかと私は言いたい——いかなる「イズム」も福音をつかむことはできません。この福音というものは、一切の限定を超えたところの驚くべきものである。

至るところに本当に友だちはいますよ。どの人も神さまの子なんです。そこにおいて本当に神の声を聞くような具合にしてあげる。我々はみな同じ罪びとである。天国へ行つてみたらば、立派な本を書いたりした神学者が、

「どっこい、ダメだ」

と言われて、門前払いをくらつて、キリストの「キ」の字も知らないような者が入つてたり、いろいろなことですよ。キリストの譬話たとえばなしにちゃんとある。

「招かれた者が一人としてここに来る者はない」

と、キリストが激しいことを言つておられる。そして、

「盲人や跛者やらい病人やいろんな者をそちらの籬まがきの外から連れてこい。天の饗宴を受けるのはそういう者たちである。いわゆる御国の子らは嘆き切歎はがみする」

という。いわゆるクリスチヤンは天国に入れないという。

レッテル・クリスチヤンではなくて、本当の人間に私たちは本当になる。そのためには、キリストの前の平伏しの魂が、キリストによつて立てられ、自由な証人となる。皆さんの中にこの靈願、悲願が湧いてきたらば、もう迫力がちがつてくるですよ、生活の迫力が。どんなに行き詰まるようなことがあつても、決して行き詰まりませんから。どうか、ひとつやつてください。私は、そういうような方々を見ていると、

「ああ、このごろ変わってきたな」

とわかるんです。それはその世界に動きだしているから。皆さんが本当にそれによつて、一人も欠けることなしにこの証人となつていただきたい。それは、

「汝の意志を」

といつて、本当に提身するところに眞の勝利がある。決して行き詰まらない。

「主イエス・キリストの御靈がわがうちに。御靈の主おもがわが中に」

と。これは何度、私たちはこのことを叫んでもなお足りない。それは祈りの世界です。

